ISSN 1883-3748

環境教育研究マネジメントセンター

News Letter

第３号 2009.5.25

長崎大学環境科学部
URL: http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax:095-819-2720

■「EPO 九州 ESD セミナーin 長崎・雲仙」開催

―北九州・熊本・雲仙の環境団体が交流―

3月24日、雲仙Ｅキャンレッジ交流センターで、環境教育研究マネジメントセンター主催の「EPO 九州 ESD セミナー in 長崎・雲仙」を開催しました。「ひろげよう・つなげよう地域の ESD」と題した今回のイベントは、ESD（持続可能な開発のための教育）の普及啓発と理解促進を目的として、地域での活動取り組みの成果報告と経験交流の二部構成として実施し、地元の雲仙市をはじめ、県内外から約 30 名の参加者を迎えることができました。

ESD という言葉自体、まだ馴染みが薄いという方も多いかもしれません。これは、私たちの未来をより良いものへと変えるための手法のひとつとしてユネスコで提唱されたものです。具体的には、世界規模(グローバル)から私たちの生活単位規模(ローカル)で生じている環境・経済・社会問題など、あらゆる問題を総合的に解決することを目指すものとされています。

第 1 部は、「地域における ESD 活動」と題して長崎総合科学大学の石橋康弘教授による基調講演と、それに続いて事例報告「北九州 ESD 活動の取り組み」「新聞メディアと ESD の連携事例」がおこなわれました。第 2 部は、「雲仙からひろがる地域の中の学びの輪」をテーマに意見交換・経験交流をおこないました。雲仙市地球温暖化防止・ESD 協議会会長を務める環境教育研究マネジメントセンター長の早瀬隆司教授がコーディネーターとなり交流を深め、地域活動のやりがいや課題といった“本音”を聞くことができました(写真)。

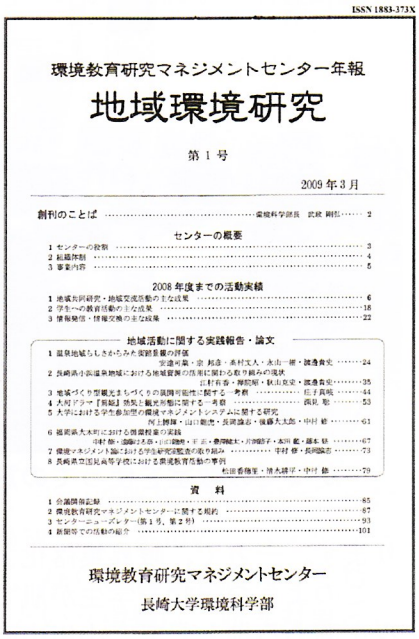
これらを通して、ESD とは決して「難しく特別なこと」ではなく、「これまでの地道な地域活動が新しい言葉で改めて大きな注目を浴びてきた」点を再認識することができたと思っています。

■センター年報『地域環境研究』創刊

2007 年 7 月に学部内施設として誕生した本センターの活動記録と、地域活動に根ざした実践報告・論文 8 編を収録した全 109 頁の年報を 3 月 31 日付で創刊しました。

センターが中心となっておこなってきた受託事業は、いずれも地域の環境問題をフィールドに出て考える内容であり、その成果のいくつかは論文としても掲載しています。

年報は 400 部印刷し、大学等関係機関の図書館や研究室に納本しました。ぜひセンターの活動のようすを手にとってご覧ください。



ISSN 1883-373X

環境教育研究マネジメントセンター年報

地域環境研究

第 1 号

2009 年 3 月

創刊のことば ……環境科学部長　武岐 剛氏……2

センターの概要

1 センターの設置 ……3
2 組織体制 ……4
3 事業内容 ……5

2008 年度までの活動実績

1 地域共同研究・地域交流活動のおもな成果 ……6
2 学生への教育活動のおもな成果 ……18
3 情報発信・情報交換のおもな成果 ……22

地域活動に関する実践報告・論文

1 温泉地域らしさからみた資源景観の評価
宗像哲雄・宗 利淳・森村宏人・永山一樹・渡邊貴史 ……24
2 長崎過小長崎県地域における地域資源の活用に関する取り組みの現状
江村有香・神院裕・秋山俊史・渡邊貴史 ……35
3 地域づくり型観光まちづくりの展開可能性に関する一考察 ……佐々真成 ……44
4 大対ツアー『郷土』熱発と観光形態に関する一考察 ……高尾 聡 ……53
5 大学における学生参加型の環境マネジメントシステムに関する研究
阿上博輝・山口朝恵・長岡論志・後藤大太郎・中村 修 ……61
6 雲仙市大町における環境教育の実践
中村 修・宗利淳・石橋康弘・山口朝恵・平石・豊岡敏仁・片岡節子・本川 敏・藤本 修 ……67
7 環境マネジメント論における学生研究調査の取り組み ……中村 修・長岡論志 ……73
8 長崎県立国見高等学校における環境教育活動の事例
松田香織里・清水謙平・中村 修 ……79

資　料

1 会議開催記録 ……85
2 環境教育研究マネジメントセンターに関する規約 ……87
3 センターニュースレター(第１号、第２号) ……93
4 新聞等での活動の紹介 ……101

環境教育研究マネジメントセンター
長崎大学環境科学部

【もくじ】

■「EPO 九州 ESD セミナーin 長崎・雲仙」開催 ・・・・ 1
■センター年報『地域環境研究』創刊 ・・・・・・・・・・・・ 2
■「地域力再生プロジェクト」スタート ・・・・・・・・・・・・ 2
■研修報告―韓国全羅南道でエコ・ツーリズムを考える ・・・・ 3
■連載　環境科学部ゼミめぐり③　姫野ゼミ ・・・・・・・・・ 3
■書架　『観光と環境の社会学』 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

■「地域力再生プロジェクト」スタート

小田山地区に広がる農村景観

現在は公民館となった旧小田山分校正門

4月14日、早瀬センター長、馬越准教授、深見准教授の3名で、雲仙市小田山地区を訪ねました。エコキャンパスを新たに小田山地区で展開していく可能性について、地元のみなさんと意見交換をしながら探ってみようというのが目的です。

雲仙市・県環境部・環境科学部は、2007年4月に三者協定を締結し、持続可能な地域社会づくり(エコビレッジ)とエコビレッジ形成につながる学生のフィールド教育の舞台(エコキャンパス)の充実に連携して取り組んできています。「Eキャンレッジ」とは、「Eco=エコ」と「キャンパス+ビレッジ」の造語であり、小浜バスセンター2階に去年10月にオープンした「雲仙Eキャンレッジ交流センター」の名前もこれに由来するものです。

かつての教室を使っての意見交換のようす

大学を出発して1時間半ほどで木指小学校の旧小田山分校に到着。今は、公民館として新たな地域教育の拠点となっています。ここで、地域活動団体「山彦の会」の方々をはじめとする約10名の地元の皆さんと、オブザーバーとして環境省雲仙自然保護官事務所の加藤雅寛氏も加わり、忌憚のない意見や要望が交わされました。

小田山分校は、1903(明治36)年に木指尋常小仮校舎として創立。1959(昭和34)年度の72名在籍がピークで、その後は減少を続け2007年3月に2人の子どもを送り出した後、閉校となっています。分校の周りには、棚田・ホタルの舞う金浜川の清流、少し足を延ばしたところには小田山神社とすばらしい地域資源があります。一方で、限界集落化、耕作放棄地の急増など、課題も多いということでした。

このような現状を学生が肌で感じ、地元の方たちとの語らいを通して地域づくりへの関心とスキルを高める地として、小田山の可能性を大いに感じる一日となりました。

4,5月のセンター運営委員会で、今年度は小田山での田植え体験や収穫、地元の地域活動団体との語らいなどを課外科目として開講することを決定しました。さらに、来年度は、正式なカリキュラム化が図れるよう、調整を進めていく予定です。

■研修報告―全羅南道でエコ・ツーリズムを考える

センター専任教員　深見　聡（環境科学部准教授・観光地理学）

5 月 1～7 日の期間で、韓国・全羅南道にある順天青巌大学を受け入れ機関としてエコ・ツーリズムに関する調査に赴いた。目的先は、遠浅の海辺が広がりツルの越冬地として知られる順天湾(左写真)と、順天市樂安面にある民俗村(右写真)の 2 か所である。

順天湾を訪れたのは 3 回目だったが、エコ・ツーリズムの見どころとしてガイド冊子でも紹介され、生態博物館も新設されるなど、年々賑わいを増しているようである。一方で、湾奥ではバイパス道路の橋脚工事がすすむ。先だって、地元の環境保護団体と道議会の議員たちが工事の一時停止とルート変更を求める動きを表明した。

樂安面の民俗村は、古い家屋を利用・再現(修景)した観光地として知られるようになった(日本語の案内ページはこちら→　http://www.nagan.or.kr/japanese/)。ここの大きな魅力は、伝統的な景観を保存するだけでなく、いまもそこに実際に人びとが暮らしている点にある。私が見つけただけでも 7 軒、「民泊」の看板が掲げられていた。日本でも人気を博したドラマ「チャングムの誓い(韓国タイトル：大長今)」のロケ地としても知られる。

ここ順天市のとなりに位置する麗水市は、2012 年に万博が開かれる。そのこともあり、この両市では外国人向けの観光施策にも力を入れ始めている。

韓国は全人口の 3 分の 1 がソウル市と釜山市に集中する。出生率は日本を下回り、地方経済の停滞は日本よりも深刻ともいわれる。ここ 10 年ほどで、韓国でもエコ・ツーリズムの言葉が流行りつつあるが、観光という行動形態が地域にどのような影響をもたらすのか、これからも追跡調査していきたい。

■書　架

『観光と環境の社会学』　（古川彰・松田素二編、新曜社刊、2003 年、￥2,625）

今や、自治体の基本計画で、観光振興を掲げないところを探すのは難しい。本書は、刊行から 5 年余りを経た今日でも、とくに過疎地域で展開されるその理想と現実のはざまにある住民の姿を考える上で、大きな示唆を与えてくれる。

編者をふくめ 16 名の研究者・新聞記者・農園経営者らが、「環境・観光・地域おこし」を一体のテーマととらえフィールドワークの成果を執筆。その中で印象に残ったのは、米山俊直氏(京都大学名誉教授)の一節である。すなわち、「むらの過疎は、…都市のノスタルジーやセンチメンタルなまなざしでもなく、むらに暮らす個人の行動を出発点として組み替える必要がある」という指摘は、研究対象として地域をみつめる機会の多い「まち」に暮らす私たちへの警鐘ととらえることもできるだろう。都市と農山村の交流や、自然環境との共生に関心のある方にはぜひお薦めの一冊である。

■連　載

—学生リレー企画— 環境科学部ゼミめぐり③〈姫野ゼミ〉

姫野研究室では、「環境経済学」を軸として、まちづくり・まちおこしなどさまざまな活動を、フィールドワークを中心に展開しています。なかでも、西海市大瀬戸町・雪浦地区において取り組んだ助成事業「荒地に花を咲かせま SHOW」では、地元の方々と協力し、耕作放棄地に数千本の満開のひまわりを咲かせ、油や焼酎などいろいろなひまわりグッズを開発しました。この活動は、長崎県から優秀なまちおこしを行なったとして表彰され、また新聞・テレビなど多くの報道で紹介されました。

このように、学校の外に出て活動することで、たくさんの地域でたくさんの方と交流することができるため、研究以外にも多くのことを学ぶことができます。

自然を相手にするため手間どることもありますが、その分ゼミ生同士一緒にいる時間が長いため、みんな仲が良く、和気あいあいとした楽しいゼミです。

(4年 番途 綾香)

事務局だより

◎ニューズレターをお手軽に

定期購読しませんか？購読料無料、年間送料分の切手代(80円×4回)のみ負担。まずはセンターまで気軽にお問い合わせください。

本紙は季刊号として2、5、8、11月に発行していきます。学内配布のほか、長崎県・雲仙市の主要公共施設に設置。また、センターホームページからPDFファイルでダウンロードも可能です。

◎「長崎県環境アドバイザー制度」をご利用ください

県内の公民館や学校・各種団体等が主催する、参加予定者が概ね30名以上の場に、主催者の経費負担ゼロで講師を派遣する制度です。同一団体は年2回まで利用できます。本センターからは3名が環境アドバイザーに登録されています。詳細は県未来環境推進課(Tel.095-895-2512)までお気軽にお問い合わせください。

早瀬 隆司 教授（環境管理・環境計画、環境政策の決定と住民参加）
中村　修　准教授（省資源・省エネルギーの問題や実践活動）
深見　聡　准教授（環境と観光のまちづくり、NPO活動）

□■編集後記■□

第3号をお届けします。センターも設立3年度目を迎えました。今年度は、新規の学生向け教育プログラムや、おもに雲仙市を会場とする市民向け公開講座をはじめ、さまざまな企画を準備しています。本紙へのご感想やご意見などもぜひお寄せください。／センター年報も何とか創刊にこぎつけました。少し肩の荷がおりたような気がします。／私事、連休明けに季節性インフルエンザに罹患。時期柄皆さんもご自愛ください。次号は8月25日付で発行予定です。　(深見)

環境教育研究マネジメントセンター *News Letter*　(第3号)
2009年5月25日発行
長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
URL http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/
Tel&Fax 095-819-2720(深見聡研究室)
E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp
(編集長：深見 聡)
印刷：株式会社 クイックプリント